

社会科学における分析視座の整理にかかわる一試論 －視座の複数性をもたらす認識論的な混乱状況の整理を題材として－

保木本 利 行

山形大学農学部食料生命環境学科食農環境マネジメント学コース
(平成22年11月11日受理)

Epistemological analysis of social science in reference to the existence of plural perspective in social actions

Toshiyuki HOKIMOTO

Course of Management of Food, Agriculture and Environment,
Department of Food, Life, and Environmental Sciences, Faculty of Agriculture,
Yamagata University, Tsuruoka 997-8555, Japan
(Received November 11, 2010)

Summary

When we explore in the reality of social action and social-historical process in the scientific research, in which human being are the objects of the study, then we confront to the unique quandary. Alone among the things and organisms studied by science, the human "object" is also a subject; the "objects" have well-developed thoughts about their own and other people's thought and behavior

No aspect of a research strategy more decisively characterized it than the way in which it treats the relationship between what people say and think and do as subjects and what they say and think and do as objects of scientific inquiry.

So in this paper, focusing on the difference of "Emical and Etical" point of view, I have attempted the interpretive understanding of the human bidirectional objective actions in order thereby to arrive at a causal explanation of the construction of social reality.

Key words : emic, etic, Verstehen, explanation, methodology, social science

第1節 はじめに

科学という営みは何を目指し、どのような方法において為されるものだろうか。この問いに対してハッキリと自覚的な答えを出しておくことは、現代を生きる私たちにとって必須の課題のように思われる。

多くの人が感じているように、いま、我々が生きている時代は混迷の時代である。この目の前の時代を見据えてゆくためには、いま目の前で起こっている状況を、事実と分析に基づいて、しっかりと認識のスコープの中に捉えなければならない。そのためには、認識における「科

学性の自覚」という課題は必須の前提条件に違いない。

しかし、自然科学においては当然の前提とされているこの“科学性”の自覚という課題が、社会科学の分野では、なかなか明確に共有され難い状況が存在している。その背景には、社会現象の認知における視座の複数性という問題、およびそこに起因する認識論上の深刻な混乱状況がある。さらにこの混乱状況は、人々が社会事象に誠意を持って向き合おうとすればするほど、すなわち人間行為の主体的側面に関心を向ければ向けるほど、皮肉なことに、ますます増長されてしまうという現実がある。

社会科学が抱え込んでいるこの固有の困難さは、いっ

たいどのようにすれば論理的に整理してゆくことができるのだろうか。本稿では、この問題を正面から考察してみたいと思う。すなわち、我々が目の前の時代を見据えてゆくための、一つの重要な根拠に違いない「科学性の自覚」という問題を縦糸として、また、生きられた実存の苦悩と格闘せんとしてきた社会科学がおちいつているかに見える認識論上の混乱状況の整理という問題を横糸として、社会科学の視座と方法について、原理的な立場から考察を深めてみたいと思う（注1）。

第2節 科学的認識とは何か

第1項 『事実』の多様性と解釈の多様性

我々は誰でも、空想的・観念的な考察が経験的事実のまえで、いとも簡単に吹き飛ばされてしまうのを知っている。たしかに我々の頭の中には、さまざまな妄想があてどもなく膨らむ。しかし、空を飛べると妄想する人間も、ビルの屋上から身を投げれば、地面にたたきつけられて死ぬばかりである。現実的な根拠を欠いた空想的・観念的な考察は、それほどにはかない。だから、年齢を重ねた人間にとって、世界の本質がその物質性にあることは、改めて言うまでもないことと思われる。“声高に叫ばなくても、弱い相手は『事実』の前に自滅する”。ここに示されるような、現実へのさめた、しかし強い信頼感に、我々の多くの健康な常識的判断は支えられている。

しかし、日常生活を注意深く振り返ってみると、このような事実への素朴な信頼感にばかりに寄りかかってはいられないと思わされる場面にも数多く出くわす。実際のところ、ハッキリと白黒をつけられないまま生き残るさまざまな解釈が、我々の頭の中をつねに覆っている。場当たりの解釈を当てはめて満足し、さまざまな解釈相互の矛盾をハッキリと見つめないまま過ごし続けることが可能である。そして、それらの誤った解釈は容易に我々の頭の中から去ろうとはしない。

我々はみな、認識・判断の根拠には、しっかりとした実在感のある現実がなければならぬと言うことは認めている。しかし、我々はそこから議論を素朴に延長して、「自分の主張が、経験的事実に支えられていさえすれば、それは科学的主張である」と、思いこんでしまっているふしがある。この素朴な誤解は、科学性への正確な理解へたどり着く道をふさぐ、つまずきの石ではなからうか。

科学性というのは、単に主張の現実的な根拠を明示すればことたれりというようなものでは決してない。

考えてみても欲しい。単に主張を論理的に支えうる事実を提示しさえすればよいというのなら、我々には正反対の主張を補佐するような事実を、いくらでも、同時に提示することが可能である。

右方向に歩いてゆく人がいれば、左方向に歩いてゆく人がいる。上に登ろうとする人がいれば、下に降りようとする人がいる。事業の拡大を目指す経営があれば、事業の縮小を目指す経営がある。正しい正義に貫かれて生きることを目指す人もあれば、正しい正義に貫かれた生き方のなかに偽善を見いだす人もいる。

我々の頭脳に住みついている、一見すると両極端の解釈には、それぞれに主張を根拠づけるような具体的な事例が、現実の中にいくつも容易に見いだすことができる。このような両極端の解釈に結びつくやに見えるさまざまな事実の併存は、我々の認識の内部に、顕著な相対主義を持ち込む導火線となる。

さらに社会科学の場合、そこに人間相互の倫理観が重なってくる。

われわれは年少の頃からつねに、人間の命ほど大切なものはないと教えられてきている。同様に、あらゆる人生の軌跡には、つねに同じだけの重さがあることを、我々は倫理的観点から経験的に理解している。こうした倫理観が、上述のような両極端の解釈を許すかに見える二種類の人間の存在を介して、互いに対立したそれぞれの解釈の擁護と結びつくと、社会科学にはさらに強力な相対主義が持ち込まれることになる。いわく、「人間が成し遂げる行為に対しては、科学的視座から解釈の真偽を決めることはできない。なぜなら、解釈のその先には、かけがえのない生きられた現実の人間がいるのであり、“それ故に”、ある特定の解釈を否定することは、その先にあるかけがえのない存在それ自体を否定することになるからだ……」と。

このようなきわめて恣意的かつ政治的主張の前で、社会現象を取り扱う科学は、容易にその科学性を放棄してゆくことになる。あるいは科学性を争うという名目で、たんに政治と権力と価値観が戦われることになる。そして、容易に調停され得ないままに、さまざまな解釈は我々の頭の中を占め続けることになる。

さらに我々人間には、見ようによってはきわめて悪質な性癖がある。それは、自らは傍観者の立場に立ちなが

ら、他者の経験に対する自らの解釈・講釈を、自信ありげに周りの人間に垂れたがる性癖である。この種の行動をするときに、我々はつねに、まず他者が陥っている現実の結果を見とどけてから、それに解釈を当てはめ、述べ立てている。だから、一見すると、そこで述べられた解釈は事実裏付けられているように見える。しかし、その解釈は、当事者であれば本来迫られたはずの事実からの検証を免れており、それゆえ自らの下す判断の根拠への深い懐疑や決断の恐怖から無縁である。ひとことで言えば、無責任な立場からの解釈である。それにもかかわらず、解釈・講釈学者としての傍観者たる我々は、多くの場合、有弁に語る自らに酔いしれて、傍観者としての自らの判断の一貫性を試そうともせず、つねに目の前の事実をつぎはぎしながら、巧みな自己の解釈を生み出し続けている。自らは決して傷つけることなく、さまざまな解釈の上に君臨しようとし続ける。

このように社会科学には、相対主義が蔓延するさまざまな落とし穴がある。相対主義と解釈講釈の蔓延がある。そして、そこからは科学性へのあからさまな侮蔑すら生まれる。ここに認識における科学性の崩壊がある。

このような相対主義の落とし穴から、我々はいったいどのようにして抜け出せばよいのだろうか。これが社会科学に取り組む者のひとつの大きな関門であろう。この問いの前で、多くの社会学者は、右往左往し続けているに違いない。

第2項 説明仮説の自覚的な検証

しかし、この問いかけは、本当にそのような難しい、哲学的な問題なのだろうか？

逆に、そこに端的に答えられないと言うことは、つまりは、科学性への正確な自覚がないままに、右往左往していると言うことを端的に示すのではないか。

そのように考え直してみよう。そして、ある面では顕著な成功を収めてきたといえる自然科学では、その科学性の根拠がどのようにつかまれているか、あらためて考えてみよう。

私は、相対主義から抜け出すためのその答えは、すでに自然科学によってハッキリと提示されていると思う。

それは簡単なことである。つまり、目の前の事実にあとから解釈を当てはめるのではなく、まず仮説として解釈を、自覚的にたてたうえで、その当否を現実の中で試そうとすればよいのである。つまり、実験的・検証的精

神の重視である（注2）。

これは一見するとたんに順序が逆だという程度の些細な違いに見えるかもしれない。しかしそうではない。事実にはさまざまな解釈を後からかぶせることと、先に立てた解釈を事実の前で試すこととは、根本的に異なった営みである。この大きな違いに対して、社会科学は一般にあまりにも自覚が足りなかったように思われる。

認識の真理性は、つねに現実と解釈との関係において成り立っている。その両者のどちらが本源的かといえば、当然に現実の方が重要である。解釈から現実を導き出しはいけない。解釈に都合の良い現実ばかりをアテハメてはいけない。だから、解釈と現実との対応関係をより堅固なものへと鍛え上げるためには、解釈を現実の前に自覚的にためすことしかない。それが科学性を保障する唯一の基準である。

だから、我々はまずあらゆる現実を見る前に、まず仮説を立てなければならない。仮説を強く自覚する。その上で、目の前にある現実を見るのである。そして、もしも仮説として予想した事態と、現実とが矛盾する場合、その仮説をいさぎよく放棄すればよいのである。逆に、仮説として予想した事態と現実とが矛盾しない場合は、そこに仮説を放棄すべき根拠はなくなる。仮説という自覚のもと、その解釈は今この時は持ち続けてもよいであろう。あくまで仮説という自覚のもとにはあるが。

このように仮説を自覚的に現実のなかで検証するというのが、科学の第一歩であり、そしてその成功の本質的な要素であろう。

むかしから経験が人間を成長させるといわれている。つまり、経験の中でなされた検証がその人間の認識を科学的に鍛え上げてゆくのである。つまり、科学的認識の原型は、すでに人間が現実の中で生きてゆく際に、誰もがだなり小なり行っているところのものなのである。

単なる経験的な認識と比較した場合の、近代科学の顕著な違いは、その検証プロセスがきわめて意識的に行われ、かつ、そこでつかみ出された仮説の一般性、論理性、首尾一貫性が、強く自覚されていることである。仮説だという強い懐疑心をもちながら、体系的な一般論を現実の中で意識的につねに試そうとしているのである。

だから、それぞれの領域の科学者を自称する人にその能力のほどを試そうとするならば、何らかの事象にたいする予想をハッキリと述べてもらえばよいのである。そしてその予想がどのような根拠と体系的・論理性をもつ

て述べられているかを聞く。そしてその人の述べた予想を、現実のなかで確かめてみるのである。これほど容易でかつ強力な科学性の検証方法はないであろう。そして多くの場合、ひとは未来に対してそれほどに確たる予想をなしえないであろう。つまり、社会科学の認識は、まだその程度にとどまる現実認識なのである。

第3節 社会科学における分析視座の特殊性

第1項 自然科学と社会科学の本質的な相違点

筆者はこれまで長く、社会科学分野で繰り広げられるさまざまな議論や認識の虚しさにおびえてきた。また一方で、生きられた実存の苦悩とかかわらんとする社会科学の視座に強い共感を覚えてきた。

そして、その私の前には、かたや、“科学性の自覚のない議論など、たんなる意見にすぎない”という自然科学者からの社会科学者に対する根元的な批判があり、かたや、“人間の実存は科学の対象ではあり得ず、社会科学にはそもそもサイエンスなどあり得ない”という科学否定論者の極端な主張がある。そして、さらに目を上げれば、これらの学者同士の真摯な、しかしある意味滑稽な論争のさきに、具体的な農村や農業の現場にたいして、社会科学が生み出すさまざまな言葉が、ふかく突き刺さることもなく、むなしく通り過ぎてゆく現実がある。

前項では、このような状態からなんとか抜け出したいという思いから、その足がかりの一つを、科学性の自覚へ求めてきた。

そこでつぎに、人間の歴史的実践的な活動の結果としてつくりあげられる社会的現実を対象として、科学的考察を加えようとするとき、いったい自然科学と比較してどのような特殊性が生じてくるのかという論点に移りたい（注3）。

前項で述べてきた科学性の自覚自体は、自然科学であろうが社会科学であろうが、いずれにおいても認められる一般的な基盤であろう。では科学性の自覚というこの一般的な側面から目を離さずに、そのうえで、社会科学と自然科学とはいったい何が本質的に「ちがう」のかと、問うてみよう。つまり、自然科学と区別される本質的な特殊性であり、かつ、社会科学的考察を貫く一般性たる側面は何だろうか、という問いである。

この問いに対して私は、「考察対象の相違、すなわち、自然科学的認識の対象は非人間的諸対象であるのにたい

して、社会科学が考察の対象としているのは“人間”自身であるかという点に、自然科学と社会科学のもっとも本質的なちがいは存在する」と答えたいと思う。

読者は、なにを当たり前のことを、と思われるかも知れない。しかし、考察の対象が人間であるということがもたらす結果は予想以上に深刻かつ困難なものである。

なぜなら、社会科学が考察の対象とする人間は、我々が仮説設定をつうじて解釈しようとする客体的対象であると同時に、その人間自身みずからの身の回りの世界を主体的に理解し解釈し行為している主体的存在でもあるのである。

自然科学的認識には、観察者たる人間が主体的に作り上げる仮説設定しか、認識の基盤はあり得ない。それに対して、社会科学においては、観察者たる私本人が自ら作り上げる仮説設定とは別に、その客体的対象である人間自身も、みずからの行為や実践の解釈をもっていて、それを観察者にたいして言葉で伝えてくるのである。すなわち、仮説設定の基盤をなす異質な立場が社会科学にはふたつ存在している。

いかに自然科学が動物行動などでも科学的考察の対象としているとはいえ、その対象とする動物自身が自らの認識を観察者にむかって語りかけてくるということはあるまいだろう。ここに社会科学に特有の困難さが発生する根本的な原因がある。

一番問題となるのは、〈観察者〉が自らの仮説をたてて、目の前の他人の行為を〈説明〉しようとしているところに、解釈を与えられようとしている客体のその当の〈本人〉が割って入って来て、自らの意志を観察者に対して解説するという事態であろう。

この場合、科学性の根拠たる仮説の検証の基準はどこに置かれるべきだろう。やはり、その〈行為者本人〉の述べる行為の解釈こそが正しいのではないか。多くの人はそう考えるに違いない。なぜならその〈本人〉は、自分自身の現実的实践においてその仮説を確かめているのであり、また、その仮説を日々自分自身の実感として受け止めているのである。いったいどうして〈観察者〉の立場からたてられた仮説と、その〈行為主体の当の本人〉によって“生きられている”意志や認識とよばれる解釈とを比較することができようか。そう問いつめられると、ほとんどの人はそれに反論できないのである。そして、ここに解釈の真偽の基準として、観察対象たるその当の〈行為者本人〉からの承認という、自然科学では存在し

なかった、仮説の“偽似”検証方法が社会科学に持ち込まれることになる。この事態は、大局的に見るならば、仮説の検証の根拠に、他の立場からの仮説が提出されているといえるであろう。いわば仮説と仮説との間の勢力争いがここに繰り広げられることになるのである。

ここにおいて、社会科学を実践しようとする者は、きわめて著しい混乱のなかに巻き込まれてゆくことになる。とりわけ顕著なのは、仮説設定の一貫的保持が著しく不安定になり、ある種の循環的な矛盾のなかに巻き込まれてゆくという点である。また人間の社会が、つねに諸個人のあいだのさまざまな対立と同盟の関係をはらんでいる以上、その現実的な対立関係のなかに、解釈の枠組み自体が巻き込まれてゆかざるを得なくなってしまうという点である。これらが、社会科学の分野に、解釈主義論争であるとか主体性論争など、自然科学ではありえないようなさまざまな論争をもたらしている根本的な原因であろう。そしてその結果もたらされるのは、顕著な相対主義の蔓延と科学的考察の放棄である。

この混乱は、しっかりと整理し解決しなければならない。そうしない限り、社会科学分野における科学性の確立は困難になるだろう。

第2項 エミックとエティックの視座の自覚的な区別

そこで、この困難を整理するために、アメリカの人類学者マービン・ハリス (Marvin Harris 1927-2001) にならって、エミック (Emic) とエティック (Etic) という用語を導入したい。この用語の導入の意図は、仮説設定と検証の一連のプロセスに無用な混乱をもたらさず、一貫性を保持するためである (注4)。

この用語はつぎのような事態を表現する。すなわちある人物Aが、ある人物Bの行為を解釈しようとしているとする。人物Aは自らの立場から説明し得るような仮説aをたてて、人物Bの行為を解釈しようとしているとする。それに対して、観察される客体たる人物Bが、自分の行為はつぎのような意図に基づいて行っているのだと、自ら自身の仮説bを主張するとする。ここに人物Bの行為を解釈するための仮説が二つ提出されたことになる。すなわち仮説aと仮説bである。いずれの立場も、仮説という意味では同等である。しかし、仮説bは、その当の行為者自身がみずからの主体的立場から、みずからの行動を律している意志を解説しているという意味で、独自の価値を持つ。これを〈エミック〉の観点からの仮説と

表現する。

誰もが知るように、人間が日常生活のなかで保持している認識には、実にさまざまな誤謬が含まれている。だから行為者自身が自らの行為の意図を解説しているその仮説bが手放しで科学性のある、検証をへた、認識であるとはもちろんいえない。しかし一方で、客観的な事態においては矛盾しているように見える行動でも、主観的にはおなじ意図にもとづいてなされている場合も多々あるのであり、そしてその意図は現にその行為者の行動をたしかに律しているのならば、エミックの視座からの仮説bは現実的な行為のたしかにある特殊な事態を表現しているといえる。それはエミックの視座以外の他の立場から、置き換え可能な事態ではない。それはまさに“生きられている”解釈である。そのことは認めなければならない。

いっぽうで、ある人物Aが提出した仮説aの場合を考えたい。この人物Aも単なる一人の人間であるという意味で、その提出する仮説aはさまざまな誤謬を含んでいる可能性があるのは当然である。ましてやかかれはその行為の当事者ではない。それゆえその行為の意図を内在的に認識することは不可能である。

しかし、もしもこの人物Aが強い科学性の自覚のもとに、仮説aを提出しているとしたらどうであろうか。強い科学性の自覚とは、説明論理における強い一般性・体系性への志向と、その説明の論拠となる仮説を経験的事実の前で謙虚に検証にさらそうとする姿勢である。彼の仮説は、決して自分自身だけの思いこみで正誤を隠してしまうのではない。彼はその仮説が他の人間にも検証可能なように、その仮説が関与する事態の、正確な証拠を提出しようとする。またその仮説が論理性をゆうしていることを大切にする。

このように科学性を自覚した、複数の人々に対して開かれた、客観的な事実認識に基づいて説明し得るような、一般的な仮説の提出を、〈エティック〉の立場からの仮説とよぶ。

この二つの立場の区別は重要である。なぜなら自然科学においては本質的に〈エティック〉の視座からの仮説設定しか存在し得ないのに対して、社会科学では〈エミック〉の視座が科学的言説の中に深く入り交じり分別不可能な状態にあるのである。

第3項 社会科学における二つの重要な研究戦略の柱

さて、人間を考察対象とする社会科学における〈エティック〉の視座と〈エミック〉の視座との区別を、このように明確に意識すると、社会科学にとりくむ観察者たる私たちの目の前には、二つの重要な研究戦略の柱が横たわっていることが見えてくる（注5）。

(1) エミックの視座に対する「理解」

そのひとつは、（自然科学とは異なる人文社会科学に特有の課題としての）行為者自身に内在する、生きられた認識としての、エミックの視座からの世界像を、観察者の視座に立って「理解」し、探索するという課題である。

言い換えるならば、これは、解釈のための枠組みを設定する主体を（仮説設定の主導権を）、解釈しようとする観察者の側ではなく、行為者自身の側に積極的に認め、その行為者本人が現に抱えている内的な意志や動機、意味、世界像を概念的に受け止め、感情的に想起し、それに即しながらその他者の行為等を「理解」しようとする試みのことである。

ここで「理解」Verstehen (understanding, interpretation) という用語に注意してほしい。この「理解」という言葉は、自然科学と社会科学とのちがいを端的に示すキーワードであるとしばしば指摘される。すなわち、自然科学は現象を外面から「観察」し、「説明」explanationしようとするのに対して、社会科学は、外面からの「説明」と同時に、他者自身が抱えている意味世界や行為に対する解釈を（行為者自身の口から聞いて、あるいは行為者の行為等からその内面を類推して）行為者自身の内面の視座から「理解」しようとする、といわれるのである。そしてこの二つの用語を用いて、たとえばつぎのような言い方がなされる。

“我々がある他人の行為を、たとえ表面上は的確に「説明」できたとしても、その説明を行為者本人に直接ぶつけてみた場合、その本人がその説明を間違っていると主張したならば（受け入れることを拒否したとしたならば）、われわれはその他者の行為を、本質的には「理解」できていないといわなければならない。”

また、“我々は他者をどのように「説明」できたとしても、その他者の意味世界を自分自身のこととして身につまされるかたちで十分にありありと感情的に想起できぬ限り、その当事者の視点にたつて、他者のことをわが

こととして「理解」したとはいえない。”等々

このように、エミックの視座からの解釈を共有するためには、「説明」ではなく「理解」が要求される。

「理解」という言葉で表現されようとしているのは、相手が私に向かって話しかける言葉や、身振りや、その彼の行為の軌跡や、その彼を取り巻いている諸事情を通じて、われわれがその当事者である相手の立場に、認識のうでで成り代わり、その身の上で感じられるさまざまな喜怒哀楽や現実的な痛み・情動等をふくめた内的世界を、自ら自身のこれまでの経験と重ね合わせながら想像し、自分自身の過去の経験やそのもとで経験した喜怒哀楽への想起と重ねながら相手の立場に共感し、その情動的色彩に彩られながら相手の頭の中に描かれているであろう世界の見え方を、できうる限り共有するということである。

このような他者のエミックの視座への「理解」が、いわゆる一般的な科学的説明とはさまざまな面に対極的な内容を持つプロセスであるは明らかであろう。そこでは、科学的検証の精神で重視されるような私の側からの能動的な仮説のアテハメの姿勢よりも、謙虚に対象の声に耳を澄ますといった受動性に徹する姿勢こそが重視される。あるいは、科学的説明においては現象のなかに見出される一般性こそが解明の焦点とされるのに対して、「理解」においては現象のなかに見出される一般性よりも、一般性に解消しきれない個性的側面、かけがえのなさ、唯一性といった側面にしっかりと光を当てることこそが、解明の焦点と見なされるのである。

なべていうならば、「理解」においては、それぞれの人間存在が単独性・かけがえのなさという本質をもっている点をどこまでも尊重し、そのかけがえのなさという本質を手放すことなく解明を進め、いや、そのかけがえのなさにこそ迫ろうとするのである。

エミックの視座への「理解」において重要となるのは、行為者本人の視座に存在する、かけがえのない、生きられた世界像の組立方それ自体を知ることである。「理解」とは、本質的には、他者の声を聞くということにおいて成り立っているのであり、また、その声を聞こうとして耳をすまし、聞こえない部分は必死で想像をめぐらせながらなんとか理解しようとするということにおいて成り立っているのである。聞こえてくるものは相手が発する声であり、決して私が相手に向かって押しつける解釈ではない。

(2) エティックの視座からの「説明」

さて、社会科学には、以上に述べてきた行為者の内在的なエミックの視座からの世界像への「理解」となれば、もう一つの重要な研究戦略の柱が存在する。それは、“外在的なエティックの視座からなされる、経験的に認知可能な諸事実にもとづいた、人間的諸実践の過程の解明という課題”である。そこでの主要な関心は、人間の歴史的・過程的諸行為の累積、その結果として我々の目の前に現れてくるさまざまな現実的な諸事象に対して、いかに論理的に矛盾のない「説明」をくわえ、その「説明」の論拠を経験的基盤のうえで意識的に検証しながら、個別的な諸現象の背後に隠されていた現実的な諸秩序、その法則的な諸連関性を、誰の目にも明らかな形に、“顕わ”に示るか、というものである。

ここでは「説明」explanation という用語に注意してほしい。この「説明」という言葉は、前述の「理解」という用語との対比においてしばしば用いられる用語であり、その主要な語義は、さまざまな諸現象を、なぜ・いかに、といった因果関係（原因と結果）の枠組みの中で相互に関係づけ、記述することをいう。

ところで、諸現象に「説明」を加えるためには、当然ながら我々自身が、さまざまな現象の背後に何らかの一般的な“因果関係”を、事前に見出していなければならない。つまり、諸現象の背後に、なんらかの一般的な“秩序性”を見出していることが前提とされている。逆に言えば、現象の背後に何らかの秩序性・概念的一般性を仮定しようと考えるからこそ、そうした一般的秩序性に依拠し、一般的な因果関係を前提として、諸現象に対してわれわれは「説明」を加えることができるのである。

「説明」は、観察者自身が主体的・能動的に作り出すものであり、けっしてひとりでに我々の耳に届いてくるものではない。だから、ひとが日常のなかで現象の背後に漠然とした秩序や一般性を、ぼんやりと受動的姿勢で無意識のうちに察知しているということと、その秩序性をハッキリと意識化し、言語において明瞭に主体的に「説明」しようと努力することのあいだには、非常におおきな質的な隔たりが存在する。

この「説明」への努力は、さまざまな副産物を我々にもたらす。

例えば、現象の背後に察知した秩序性を、「説明」をつうじて明瞭に言語化しようとするれば、当然ながら、そ

の論考内部の論理的な整合性を、我々は強く意識せざるを得ないし、説明が依拠している仮説的論拠の概念規定もハッキリさせなければならない。

そして、説明が依拠している仮説の論理的構造が明瞭になればこそ、それを事実の前で自覚的に検証することが可能となり、そこにはじめて、その「説明」において前提とされた秩序性・概念的一般性、因果関係の、科学的な正当性が明確にされ、我々の認識内部にすくっていたさまざまな予断や誤謬が現実によって選別され、「説明」の論拠をよりいっそう堅固な基盤の上に据えることができるようになるのである。

もちろん、科学の科学たるゆえんは、概念的論理性を事実の前で検証にさらすということにあるのだから、この「説明」においては、経験的データによって検証不可能な論理性はその土台とはなり得ないことはいうまでもない。

あるいは、説明を下す本人の側に、その「説明」の論拠とされた論理性が、つねに明確に自覚されていればこそ、その場その場で下されるひとつひとつの異なった「説明」の、互いのあいだの論理的関連性や互いの矛盾にも、その本人の側からつよく意識が払われることとなる。そしてその結果、場当たりの、異なった前提から議論をスタートさせるのではなく、あらゆる人間の現実的な諸活動を、歴史貫通的につらぬくところの一般論を土台とし、その上に、それぞれの特異性を加味した議論を階層的に積み上げ、整理してゆこうとする体系化への努力が重視されるようになるのである。

そして、このような体系的な秩序性を自覚するようになってはじめて、ひとは、さまざまな特殊性を切り離してみるのではなく、その背後にある一般性における結びつきを視野に納めながら、それぞれの特殊性を眺めることが可能になる。また、バラバラなままでは我々の認識に登らなかったようなそれぞれの特殊性の間の結びつきが新たに認知される契機が与えられるし、世界の構造的連関の体系性のなかでの個物の相対的な位置づけを自覚することができるようになる。その結果として、われわれの世界認識はより豊かに発展してゆくのである。

このようなエティックの視座からなされる「説明」が、前述の「理解」とはさまざまな面に対極的な内容を持つプロセスであることは、もはや明らかであろう。そこでは、謙虚に対象の声に耳を澄ますといった受動性よりも、仮説のアテハメや意識的な検証といった能動的働きかけ

により、無言のままに隠されていた諸秩序を、人間が“暴露”し“顕在化”させんとする姿勢のほうが重視されている。また、前述の「理解」においてはそれぞれの個的存在の唯一性の強調こそが焦点であったけれども、「説明」においては現象を貫く一般性の積み上げ、現象の背後にある体系化された秩序性を明らかにすることこそが焦点となるのである。

第4項 社会現象の考察に求められる複眼的視座の両立 という課題の困難さ

さて、以上のような考察によって、自然科学と比較した場合の社会科学に特有な困難は、考察対象が人間であることに起因して生ずることが明らかになったであろう。

社会現象は、自らの意志を持ち、自らの考えに従って行為を成し遂げる“人間”の主體的な実践の結果として作り出される現象である。そのために、社会科学においては、つねにあらゆる側面において、観察者の立場から一方的に当てはめられる「説明」ばかりでなく、主体内在的なエミクの視座への「理解」が必要とされてしまうのである。つまりあらゆる社会現象の考察において、「理解」と「説明」という複眼的視座を保持し続けることが要請されるのである。

それに対して、本章の冒頭で述べたように、自然科学の諸分野には、社会科学に特有な「理解」という戦略課題が存在しない。

しかし・・・仮説の設定主体が自らの側にしかないのか、考察対象の側にもあるのかという違いは、考えれば考えるほど本当に大きなものである。

表面的な相違を考えてみてもよい。たとえば自然科学では本来的に「理解」に関わらずともすむために、戦略課題はひとえに「説明」に集中することとなり、つねに能動的に・自らの側の論理的・一貫性を強く自覚して論考を進めることが可能となった。その結果として、「説明」の検証可能性も強く意識されることとなり、自然科学の諸分野は、現在すでに物理化学の世界像という、互いの「説明」を正確に重ね合わせるための一般的解釈枠組みをハッキリと共有することとができるまでに到っている。そして、その土台を踏み台にして、さまざまな諸分野の領域横断的な知見を、たとえば、無機科学分野の専門的知識を生態学分野での専門的知識や研究成果に、正確に重ねながら、議論を積み上げてゆくことが可能と

なっているのである。

それに対して、社会科学においては、自らの側が自覚した論理性とはまったく出自を異にした他者の側の論理性への「理解」という地平がどこまでいっても求められることとなる。そしてこの「理解」の重視は、それぞれの個的存在の個性的な側面への注視をもたらすために、観察者側の一方的な能動的仮説設定を、ある意味で、つねに突き崩す作用をもち、現象の解明の柱となる論理的一貫性の保持を著しく困難にさせてしまうのである。その結果、論理の検証可能性もおざなりにされ、現象への解釈のたて方も、さまざまな雑居状態におかれている現状である。

さらに方法論にかかわる哲学的な論争がもたらす困難さも加わってくる。たとえばそれはつぎのような指摘を考えてみれば分かるであろう。

「人間の対象化行為と相互関係性がつくりあげている“社会”現象は、その端緒を求めれば一人一人の諸個人の主體的な選択の集合体でしかないはずだ。ではどうして、このかけがえのない、ひとりひとりの、いわば自由と創造の基点と位置づけられるような選択の集積の先に、説明的言説が重視するような、“秩序性や法則的な諸連関性”という、人間の主体性からはもっとも遠いような帰結が見出されうるというのだろうか？」

あるいは全く逆の立場から次のような問いかけをしてく人もいるに違いない。

「他者のエミクの視座への理解などというけれども、どうしてそんなことが可能なのだろうか。他者の実存の領域は、本質的には科学的な視座が届き得ない不可知の領域なのではないのか。考えても見て欲しい。他人の頭脳のなかに我々は絶対に実在的に入り込むことはできないのである。理解などというものをもともとて七転八倒しても、結局、その人はみずからのつくりだす夢物語のまえて、無為な空想をめぐらせているだけに終わってしまうのではないか？ 他者を見つめるときに、われわれの現実的に立ちうる視座は、観察者としてのエティックの視座からのそれしかありえないのだから、他者のエミクの視座への理解など、原理的に言って不可能だと素直に認めるべきであろう。」

前言では、エティックの視座からつかみとられた認識に対して、エミクの視座にたったときの実感にもとづいて強い違和感が投げかけている。それに対して後言では、エミクの視座からの実感溢れる認識に対して、エ

ティックの視座から根本的な違和感を投げかけている。つまり、エミックの視座がエティックの視座を批判し、また、エティックの視座がエミックの視座を非難しているわけである。

前項までの記述では、社会科学におけるこの二元論の異質性を意図的に強調したから、混乱は少なかったけれども、この異質な相貌にある二元論を改めてたがいに重ね合おうとすると、そこには非常に困難な解決不可能と思われる矛盾が次々と見出されてくることになる。いわばエティックの視座からの正当性の主張と、エミックの視座からの正当性の主張が、ここではたがいに激しい非難合戦を始めることになるというわけである。

しかしこのような視座の複数性に起因する混乱を解決しないままでは、社会科学の考察が力強く前進することはあり得ないであろう。そこで次節では、エミックの視座からの「理解」とエティックの視座からの「説明」という二元論を、社会現象の存在論的な視角からもう一度考察し直してみることとしたい。

考察の題材としては、社会現象をつくりあげるもっとも基礎的な単位と見なしうる人間の対象化行為（人間の意識的な実践・表現行為）と、その対象化行為によって現実世界のなかにもたらされる物質的な実在物としての〈表現〉をとりあげる。

考察の題材をここに絞る意図は、人間の主体的な行為の結果としてこの世の中に生み出される物質的な存在としての〈表現〉をいかに考察するかという枠組みのなかに、社会現象を考察するうえでの非常に重要な論点が提示されていると考えるからである。

すなわち、次節での論述は、筆者なりの、社会現象を考察するに際しての重要な足場となる、一般的な概念的モデルの措定である。

第4節 人間の相互理解の存在論的な基盤の考察

第1項 人間の対象化行為が作り出す諸事物は「理解」の対象である

我々の身の回りには、岩であるとか気象現象であるとか裏山の森のふもとで生息しているミミズ等、人間の存在からは本質的に独立した、それ自体として存在する物理化学的・生物学的な諸実在物が存在している。

しかし、この世の中に存在するのはそれらの諸物ばかりではない。

だれもが知っているように、人間は日々、自分の頭のなかに存在する欲動や意志の形を、対象化行為をつうじて、さまざまな形で、現実化している。その結果として、我々人間の目の前には、人為によって作り出された、さまざまな物理的実在物や現実的な諸事象・諸行為が存在することとなる。これは例えば、故意に相手に向けられた背中であるとか、言葉であるとか、ピラミッドのような人工的な構築物であるとか、科学技術の粋を詰め込んだ精密な工作機械であるとか、観衆が固唾をのんで見守る中じっと鍵盤の前での意図した演奏者の長い沈黙であるとか、さまざまな例を挙げることが出来る。これらの諸実在物や諸事象は、人間がその主体的な実践によって作り上げ、あるいは、もたらされたものであり、人間が存在しなければこの世の中には存在しなかったはずのものである。

人間の対象化行為によって実体化されたこれらの諸事物は、それぞれの個々の人間の脳髓のなかに内在する精神現象ではなく、人間が感性的に認知することができる物理的な実在性である。この点では人間の対象化行為によって実在化した諸事物と、それ以外の本源的な物質的世界とに本質的な区別はない。

しかし、人間の対象化行為によって客体化された諸事物は、たんなる感性的認知の対象物というだけではなく、人間の主体的な行為によって作り上げられた結果でもある。それゆえ、それらの諸事物は、その諸事物の作製者である本人が、その対象化行為において意図し、抱いていた認識内容に即して、“理解”されなければならない、という特殊性を持っている（注6）。

この特殊性は、人間の対象化行為によってもたらされる諸事物のうちで、とりわけ〈表現〉とよばれる諸事物、すなわち、行為者の認識内容それ自体を他者に伝達することを目的として対象化された実在事物においては、重要な特質になってくる。

しかし、〈表現〉のみにかぎらず、例えば、人間がつくりあげるさまざまな労働生産物においても、その製作過程において意図された目的性を了解しなければ、われわれはそれらの生産物を適切に活用することができない。その意味では、あらゆる人間の対象化行為によってもたらされる諸事物においてもつねに要求とされる特殊性でもある。

例えば、ここに一匹のネコがいるとしよう。このネコを、高度に整備されたコンピュータールームに導き入れ、

その身の回りを人間が活用するようなさまざまな諸機械で囲ってみるとしよう。しかし、猫をこのようにいくら人間と同じような立場に置いてみても、猫自身が身の回りを囲んでいるそれらの物質的実在性の（作成時に人間がそこにこめた意図としての）使用目的を理解して、それらの諸機械を利用することができない限り、こうした機械類は猫にとって存在しないも同然となってしまう。

つまり、人間がその対象化行為において身体外に作り上げるさまざまな諸事物や諸行為や諸事象は、その裏側として、（その諸事物がこの世の中に実在化させられるに際して人間がその対象化行為にこめた）意図を「理解」し、それに基づいてその諸事物へかかわることを必然的に要求するのである。

なお、ここでもちいた「理解」という用語は、本稿の前段部で用いた用語法とまったく同様の意味で用いている点は注意しておいていただきたい。

人間の対象化行為に込められた意図を「理解」しながら、その行為の結果物に関わらなければならないということと、他者の行為に込められた意図を「理解」しながら、その行為を受け止めなければならないと言うこと、あるいは他者の認識内容を、その当事者のエミックの視座にたつて「理解」するということと、まったく同義の内容なのである。

第2項 〈表現〉に対する観察者の立場からの直接的〈理解〉の不可能性

さて、この〈表現〉に込められた意味内容の「理解」であるが、これは、その〈表現〉を作成した本人にとってはもちろん容易なことであろう。それは、自分がなした対象化行為を、思い出しながら、その過程を逆方向に正確にたどればよいだけの話である。

しかし、〈表現〉を作成した本人以外の認識者においては、その作業はもちろん容易ではない。「理解」に際して求められるのは、〈表現〉を作成した本人の内在的な視座に仮想的に立ち、その表現者の内面的な認識内容が〈表現〉へと対象化される過程を、逆方向に正確にたどることであるが、当然ながら、〈表現〉の作成者本人と、〈表現〉の受け止め手・認識者とは別の人間であり、その頭脳と頭脳の間にはなんの直接的な結びつきもない。だから、他者の立場に完全になりかわることは現実的に不可能な要求なのである。

ここに、〈表現〉の「理解」にともなう大きな難問が

横たわることになる。つまり、〈表現〉に込められた認識内容を受け止めるために、我々はつねに主体内在的なエミックの視座に立った〈理解〉というものが求められるのだが、しかし、それは表現の作成者以外の他者の立場からは原理的に為しえない不可能な課題だという難問である。

例えば、ここに何枚もの抽象絵画があるとしよう。そして、この抽象絵画は、作者が自分のかけがえのない思いのたけを必死に表現してきた結果であるとしよう。

この作者にとっては、これらのどの抽象絵画も、それを見るたびに、自分自身のかけがえのない思いや認識内容を思い出させてくれる財産であろうし、その目の前に並べられた幾十枚もの絵画を一望して眺めるとき、時間の中での自分自身の思いの変化の軌跡や、浮き沈みの様、さらには、自分自身のひとときひとときの思いだけでなく、それらのさまざまな時間を貫く、自分の人生の全体像の意味をすら、その作者には、感じられるに違いない。認識内容の対象化としてのこの抽象絵画〈表現〉は、作者にとって、自分の内面的な思いの形を客体的に認知する機会を、その作者に与えるのである。

しかし、この事態は、作者以外の他人にとってはどうか。キャンバスに描かれた抽象的な造形から、他人ももちろん、さまざまな印象は受けとるであろう。しかし、その折に、表現の受容者が感じる特殊な感慨は、その表現の作者のそれとはまったく異質である。そこには作者本人に与えられたような、作成過程において抱かれていた認識内容の再想起や突き合わせ等の、認識の確認や発展の契機は、そもそも与えられていないのである。

では、果たして、〈表現〉に込められた認識内容の、他者からの“理解”不可能性というこの難点は、いかなる手段を講じれば乗り越え可能なのだろうか。それともいかなる手段を用いても乗り越え不可能な問題なのだろうか。

第3項 〈表現〉に対する観察者の立場からの“説明可能な”〈意味〉の付与

そこで、考え方を変えて、まず、〈表現〉が人々の目の前に存在するということを意識的に出発点にして、この一連の過程的構造を考察し直してみることとしよう。（なお、これは考察の視座を、いままでのエミックの視座からの「理解」というアプローチに代えて、エティックの視座から「説明」できないかと模索し直すこ

とを意味する。)

〈表現〉の存在自体を出発点とするとは、私の目の前にこの木や石や太陽があるのと同様に、人間が作り上げた〈表現〉がこの目の前に実在しているという事実を出発点にするということである。

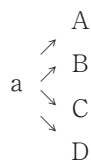
この〈表現〉は、物理的な実在性であり、私の前だけではなく、あなたの目の前にも、彼の目の前にも、現実的に存在しうるものである。それは他者の脳髓のなかに存在し、直接確認することがかなわない認識内容それ自体ではなく、現実的な一つの物理的実体である。

そして、我々は、この物理的実体である〈表現〉を、我々人間に生得的に与えられているパターン認識の能力を駆使して、一般的な視座から「説明」されうる何らかの認識内容に結びつけられないかと探求する、と考えるのである。

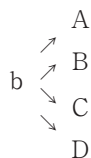
ここでわかりやすく記号を使うことにしよう。

それぞれの諸個人の頭脳の中にある特定の認識内容を、小文字の英字 a b c d …… 等で表すことにする。また、その認識内容の意図的な対象化の結果として現れる、なんらかの形態を有した物理的実体としての〈表現〉を大文字の A B C D …… 等で表すことにする。

頭脳の中にある特定の認識内容 a は、さしあたってどのような形態の〈表現〉に置き換えることも理屈の上では可能である。



また、別の人物の頭脳の中にある特定の認識内容 b も、さしあたってどのような形態の〈表現〉に置き換えることも理屈の上では可能である。



ここで、この二人の人物の頭脳の中にある認識内容 a と b は、それ自体取り出して外に持ち出すことは不可能なのだから、現実の中での直接的な突き合わせは、物理

的には不可能である。これが前述した、〈表現〉に込められた認識内容への直接的「理解」の困難という問題である。

そこで、考察の焦点を変更し、直接的に認知が不可能な認識内容それ自体に変えて、それぞれの人物にとって客観的に認知可能な対象である、認識内容が対象化された特定の形態をもった〈表現〉それ自体に注目することとしたのである。

例えばここでは、さまざまな表現のなかで、A という特定の形態をもった〈表現〉を取り上げるとしよう。ここでいうところの A という類型は、我々の人間の知覚に置いて、ひとつの特定のパターンに属すると認知されるような、典型的な物理的形態を有した、客体物、行為、あるいは行為の結果等をさしている。

ところで、先ほどの例で言うならば、この〈表現〉A に対して、ある人は認識内容 a を、またある人は認識内容 b を …… 等々と、それぞれの立場から当てはめている場合があり得るだろう。

a → A
b → A
c → A
d → A

しかし、ここで私にとっては、それぞれの人間の頭脳の中に存在する認識内容 a b c d …… の区別はさしあたって関係はない。なぜならば、上述したように、それは実際のところ区別を確かめる手段がない領域なのである。重要なのは、私本人の目には、同一の類型と認知されるような〈表現〉A が、さまざまな場面でさまざまな人間によって対象化されているように私には見えるという点である。

そして、このように私の目の前に現実的に立ち現れてくる、この“同一”に区分される〈表現〉A に着目すると、“それを媒介として”、同時に私の目には、その〈表現〉に随伴するさまざまな諸文脈が同時に、私の目の前に、互いにつき合わされて見えてくることになるのである。

これはいままでにはあり得なかった事態である。

もしも私自身の視座から同一と見なされるような〈表現〉A が存在しなければ、その〈表現〉A が置かれることとなったさまざまな文脈は、単にバラバラな、それ

それに無関係な事態と受けとめられたであろう。しかし、この〈表現〉が、これらのさまざまな事態のどの場合にも認められるという事態を通じて、その〈表現〉に随伴しているところのさまざまな文脈は、それぞれ一つ一つは多様であるにもかかわらず、その多様性を乗り越えて、いまや互いにつきあわされることとなる。そして私は、その多様な文脈のいずれにも当てはまるような共通性・一般性を見出そう、その共通性への認知を足がかりとして、その〈表現〉を為した行為者の頭脳の中に宿っていたであろう認識内容を推論しよう、という動機付けを与えられることとなるのである。

こうした共通な意味内容の探索は、我々の認識能力の内部に本源的に存在しているパターン認識と推論能力の駆使によっておこなわれる認識過程である。人間は物事のあいだの“ちがひ”に着目することで“同じ”側面を浮かび上がらせ、また逆に、“同じ”に着目することで“ちがひ”を浮かび上がらせるという思考能力が備わっている。人間には、パターン認識と推論能力によって、個別的事象をできるだけ一般的な側面からつかまえようする強い本質が宿っているのである。

さて、以上のような、〈表現〉A が置かれた諸文脈を貫く一般的な側面への注視を通じて、この〈表現〉A に対して、私の立場からの納得に置いて、なんらかの特定の「説明」可能な認識内容（意味・意志等）が指定されたとしよう。

この特定された意味は、はたして、具体的なそれぞれの表現者の頭脳の中に実際に宿っていた認識内容 $a b c d \cdots$ と同じであるかは、わからない。その保証もない。

しかし、その保証は永遠に得られない彼岸にあるにもかかわらず、私は目の前の此岸にあるさまざまな状況や文脈を見つめることで、観察者である私は、与えられた状況の中から、それらの諸文脈に対して一貫した「説明」が可能となる、“共通の”認識内容を導き出したのである。その点が重要である。

ここに指定された観察者の視座からの「説明」は、決して恣意的に観念論的に指定された内容ではない。私なりの視座からではあるが、その〈表現〉がおかれた諸文脈を経験的に受け止め、その諸文脈を素材としてパターン認識能力を働かせることにより、〈表現〉の背後に仮定できる、ひとつの特定の認識内容（パターン・概念性）を否定なくつかみだしたのである。

ここで、このようにして私の頭脳の中に生じた、特定

の〈表現〉に対する共通な内容の指定を、〈表現〉A に対する“説明可能な”〈意味〉と呼ぶことにしよう。“説明可能な”〈意味〉という言葉で表しているのは、〈表現〉がなされたさまざまな具体的文脈を観察することで、それらの〈表現〉の背後に認識者の立場から仮定された、ひとつの特定の認識内容（パターン・概念性）のことを指す。私はさまざまな表現行為の具体的な文脈の中から、その〈表現〉がなされた文脈の背後に、概念的な範疇としてのひとつの〈意味〉を推論し、その〈意味〉を原因性として指定することで、その〈表現〉が指し示すところの内容を、おかれたさまざまな文脈と矛盾しない形で「説明」しうることを示したわけである。

なお、この“説明可能な”〈意味〉として捕まえられた、それぞれの〈表現〉の意味内容と位置づけられた認識内容を、ここでは、 $a b c d \cdots$ という記号で表すことにしておきたい。いくつもの記号を区別した理由は、同一の〈表現〉に対する“説明可能な”〈意味〉の指定も、観察者自身のそれぞれの脳髄の中に反映されざるを得ず、その意味では、必ずしも全く同一な認識内容と仮定することはできないことを見越してのことである。

なお、前述の $a b c d \cdots$ として示してきた、表現行為の主体者自身の側の〈表現〉にこめた認識内容は、対比の意味で、（行為者本人に）“理解された”〈意味〉と呼ぶことにしよう（注7）。

第4項 〈表現〉の「理解」における一般的構造モデルの指定

さて、このように認識内容の対象化行為とその結果としての〈表現〉にかかわる上述の議論を振り返ってみると、ここに、次のような一般的な図式が指定できることがわかる。

すなわち、ひとつの物質的な実体としての〈表現〉には、二種類の異質な視座からの人間の認識内容が結びつけられているのである。

ひとつは、その〈表現〉を対象化した行為者本人の立場からの認識内容である。

もう一つは、その〈表現〉に対する、観察者の立場から指定される認識内容である。

これは言い換えれば、ひとつの物質的な実体としての〈表現〉の両側に、前述の社会科学におけるふたつの根本的に異質な視座、すなわち、主体内在的なエミックの視座からの解釈と、観察者の立場からのエティックの視

座からの解釈とが、表現を媒介して、互いに切り離せない形で結びつきながら存在しているということを意味する。

記号で表現すれば次のようになるだろう。

$$\begin{array}{ccc} a & & \alpha \\ b & & \beta \\ \rightarrow A \rightarrow & & \gamma \\ c & & \\ d & & \varepsilon \end{array}$$

これはおもしろい図式であろう。なぜなら、前章の議論では、主体内在的なエミクの視座と、外在的なエティックの視座とを、混同してはならない異質な視座として整理してきたのであるが、ここでは〈表現〉という物質的実在を媒介として、本来的には異質な二つの視座からの認識内容が、“互いに深く結びついている”のである。ここには、社会科学的な思考における基本的な問題構図が示されているに違いない。

先ほども少し述べたけれども、私は、この図式を、〈表現〉にたいする一般モデル、いや社会科学的な考察を進める上でのひとつの一般モデルとして活用できると考えている。なぜなら、人間の作り出す社会的現実、すべてが人間の対象化行為によって実在化された客体事物の累積と見なしうるものであり、すなわちすべての社会的現実の考察には、一つの例外もなくつねに、この一般的なモデルを当てはめることが可能と考えられるからである。つまりこの図式は具体的な個々の社会現象を解釈するための一般的な枠組みとなりうると考えられるのである（注8）。

しかし、このような言い方をしても、現段階ではまだ不明であろう。その内容は少しずつ具体的に説明してゆかなければならない。だからこのモデルを利用して、もう少し、詳しく考えてみよう。

第5項 同一の〈表現〉に付着したエミクの視座とエティックの視座との本質的異質性

まず、特定の〈表現〉の両端に結びついている主体内在的なエミクの視座からの“理解された”〈意味〉と、外在的なエティックの視座からの“説明可能な”〈意味〉とは、互いに異質な認識内容であることを、ここではあえて空想的な事例を想定することで、もう一度再確認しておきたい。

例えば今ここに、地球上の生命とはまったく異質な異星人が、まったく見たこともないような物質でできた奇妙な物体を、我々の目の前にそっと置いて、そして、彼ら自身は跡形もなく消え去った、という空想的な事態を考えよう。

この場合、この異星人が、“ハッキリとした意図と”を持ってその対象化行為を行い、その物質を残したと見なすならば、それはつまり、異星人が何らかの意図を込めたところの、ひとつ〈表現〉を行ったと見なしうるだろう。

その場合、我々地球人は、この特殊な〈表現〉を前にして、その〈表現〉に随伴するところの文脈や周囲の状況をさまざまに比較考衡して、その〈表現〉に対して、なんらかの“説明可能な”〈意味〉を必死になって推論・措定しようとするだろう。

しかし、異星人と地球人とは、互いにまったく異質な存在である。そのために、この両方の視座とその認識内容は、互いに重なり合えず、重なり合わせる方法も存在しない。すなわち、両端の認識内容はその本質において異質なままであり続けるしかないことになる。

このような特殊例で考えると、この二つの視座の異質性はよく理解できるであろう。

この異質性は、同一の〈表現〉が何回行われても、本質は変わらない。

例えば、先ほどの異星人の奇妙な〈表現〉が、たった一度きりではなく、複数回にわたって、地球上のさまざまな状況の下で起こったとしよう。

しかし、その結果として起こるのは、地球人である我々が、その奇妙な〈表現〉の背後に読み取る文脈構造がより詳細となるということのみである。

すなわち、エティックの視座に立つ地球人である我々にとっては、その〈表現〉の内容を推測する現実的な手がかりが増えるために、その〈表現〉の“説明可能な”〈意味〉として措定できる内容が、よりさまざまな状況の比較考量を通じて、より明確な内容としてつかまえられるようになるという変化は確かに起こる。しかし、同一の〈表現〉の出現回数の増大は、どこまでいっても、人間の視座、すなわちエティックの視座からの“説明可能な”〈意味〉の想定として明確化されてくるのみであって、観察者である地球人と、表現者である異星人との間の、視座の設定における決定的な異質性は、いつまでも平行線として残ってしまい、難点は解消されないままである。

すなわち、この二つの視座の異質性は、同一の〈表現〉にであう回数の多寡においては解消されないのである。

第6項 ふたつの異質な視座のあいだの架橋の可能性の現実的な根拠

では、この二つの視座は、どうしたら互いに架橋することが可能となるのだろうか？

あるいは、どうしたらこの二つの視座は互いに結びつきうるのだろうか？

これを考えなければならない。

ここで重要になってくるのが、表現を“双方向的”に対象化することが可能かどうか、という論点である。

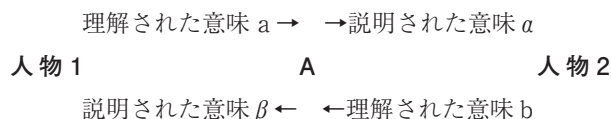
たわいもない空想話なので、これ以上論述を重ねるのは控えたいが、ここで注意を払って欲しいのは、上述した異星人と地球人の事例においては、〈表現〉の対象化が、異星人から地球人に向けて為される場合のみが想定されていて、地球人から異星人へ向けての逆方向での表現対象化が想定されていないという点である。つまり、上述の事例では、二つの異質な立場のあいだに、双方向的な関係を結びうる基盤が想定されていない。つまり、同一の〈表現〉を“双方向に”対象化する可能性がそもそも与えられていないのである。結果として、表現に付着する二つの視座と認識内容は、いつまでも、互いに、異質なままとして残るしかないという状況に終わらざるを得なくなる。

しかし、幸いなことに、人間と人間との間の〈表現〉を介した関係においては、さまざまな種類の〈表現〉を、互いに双方向的に“共有”することが原理的に可能である。言い換えれば、たがいに“共通”とみなしうるような、いくつもの特定の〈表現〉形態を、“双方向的に”対象化しあう可能性をもっていることが、いわば前提とされているのである。

そして、この事実が、〈表現〉に結びついた二つの異質な視座のあいだの架橋に、その突破口を開ける現実的な基盤を我々にあたえることになる。

第7項 同一〈表現〉形態の双方向的な対象化

人間同士が、同一形態の〈表現〉を“双方向的”に対象化することが可能だと前提した場合とは、図式的に考えると、つぎのような事態であろう。



ここで重要なのは、人物1と人物2のいずれもが、表現Aの対象化という過程にたいして、ともに表現の作成者という主体的立場からも関与し得るし、また同時に、対象化された表現Aに対して、表現の受容者、すなわち観察者の立場からも関与しうると言う点である。

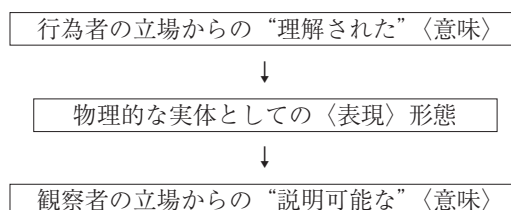
これはつまりは、そのひとつの“同一”の〈表現〉の両側に存在する、主体的なエミットの視座からの“理解された”〈意味〉内容と、外在的なエティックの視座から得られた“説明可能な”〈意味〉内容のいずれもが、一人の人間の頭脳の中に、現実的に存在しうる可能性が与えられているということを意味する。

我々はもちろん物理的な存在としての他者になりかわるわけにはいかない。それは願ってもかなわぬ、不可能な課題である。しかし、我々は、“双方向的”な表現の対象化という経験を通じて、互いにその立場を入れ替えあうことによって、物理的な実在性としての“同一”の〈表現〉の主体者側と観察者側のそれぞれの立場に、ともに立ちうる機会が与えられているのである。これは、空想的ではない、現実的な可能性である。

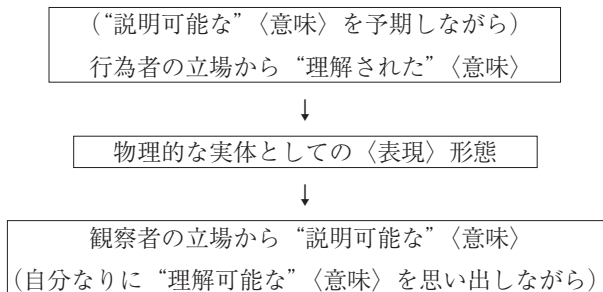
第8項 双方向的な対象化可能性のもとでの、〈表現〉の一般図式

では、このような、“双方向的な〈表現〉の対象化の可能性が与えられている場合”の、〈表現〉をとりまく過程的構造の一般図式はどのようなになるだろうか。

前述の表現の一般図式においては、次のような図式を設定していた。



しかし、双方向的な対象化可能性をもった〈表現〉においては、その図式は以下のように拡張されることとなる。



この図に示されているように、“双方向的な〈表現〉の対象化の可能性が与えられている場合”には、〈表現〉の対象化をした主体者本人は、過去にエティックの観察者の立場から、その〈表現〉に対して自分なりの“説明可能な”〈意味〉を見いだした経験を持っていることが想定されている。そして、そのおりの経験は記憶として保持され、そこに見出された“説明可能な”〈意味〉が、今現在の、自身の表現の対象化過程においても、一定の『予期』として、その表現対象化に込められた意図自体に影響を与えると想定されている。つまり、“説明可能な”〈意味〉の内容を踏まえた上で、いま新たに、“理解”した〈意味〉という形で、〈表現〉を対象化すると見なされているのである。

逆もまた同様である。すなわち、“双方向的な〈表現〉の対象化の可能性が与えられている場合”、彼には、過去にその表現の制作者、すなわちエミクの視座にたつ主体としてその〈表現〉を対象化した経験をもっていることが想定されている。それゆえ、彼の記憶のなかには、そのおりに、“理解”していた〈意味〉が、現在も記憶として残っているということになる。すると彼のその記憶は、やはり一定の『予期』の構造として、現在のかれの眼前にある〈表現〉の認知にも影響を与えることとなる。すなわち、過去の主体者の立場にあったさいの記憶を思い出しながら、その意味内容も含めて、彼は、いま現在の、観察者の立場において目の前に出会っているその〈表現〉に、“説明可能な”〈意味〉を措定するだろうと見なされるわけである。

このように、同一の〈表現〉の両端に位置する二種類の異質な視座に、ともにたちうる現実的な可能性が与えられている場合、それぞれの立場にあった際の過去の記

憶を通じて、ある特定の『予期』が生まれ、その『予期』の実在という足場を通じて、この異質な二種類の視座からの認識内容が、それぞれの人間の脳髓のなかで、互いに比較考量され、相互に影響を及ぼしあうことが可能となるのである。これが“双方向的な〈表現〉の対象化の可能性が与えられている場合”の、〈表現〉の過程的構造の一般的な図式である。

第9項 エミクの視座とエティックの視座のそれぞれにたちうる頻度の多寡がもたらすもの

ところで、ここでさらに検討すべきなのは、その二種類の認識内容どうしが相互に与えあう影響の程度という問題である。

考えてみれば分かるように、二種類の視座からの認識内容が相互に影響を与えあう可能性の程度は、私自身が、それぞれの視座に立ち得た現実の可能性の多寡の程度によって大きく異なってくると考えられる。

例えば、もしも私にとって、その〈表現〉の制作者、エミクの視座という主体者の立場にたちうる機会が、限りなくゼロに近いものだったならば、私がエミクの視座からの認識内容を主体的に経験しうる可能性もゼロでしかないであろう。そのような場合には、その〈表現〉に対して私がいなく認識内容は、ほぼすべて外在的な観察者のエティックの視座に由来するものとならざるを得なくなる。すなわち、ほぼ100%傍観者、たんなる外部者の視座である。

それに対して、逆の場合もある。すなわち、たとえ私が、常日頃、主体的な立場において特定の〈表現〉を高い頻度でおこなっているとしても、その〈表現〉の受容者という立場に自らを置いて、〈表現〉を観察者の立場から見直す機会をほとんどもたない場合には、私のエミクの視座からの認識内容は、エティックの視座にたった認識内容からはほとんど影響を受けないということになってしまう。これはいわば、ナルシズム状態にとどまった認知状況である。

つまり、同一の〈表現〉の両端に存在するエミクの視座とエティックの視座のそれぞれに、当人が現実的に立ちうる可能性の程度は、その二つの視座から認識内容の突き合わせ過程や二種類の認識内容の相互の規定関係の程度に大きな影響を与えられられるのである。

第10項 無限の双方向的な対象化可能性をもつ特異な〈表現〉形態

このような同一〈表現〉の両端に存する異質な立場を現実的に経験しうる可能性の多寡という論点に着目すると、さまざまな実体化された〈表現〉の中で、認識内容の社会的交通手段としての機能を果たすべく人間が作り上げてきた〈言語表現〉とよばれる特殊な〈表現〉形態の存在のもつ機能もハッキリと見えてくるに違いない。

この“言語”とよばれる〈表現〉形態が、〈表現〉一般と区別される特殊性は、それが人間同士の“双方向的”な認識内容の交通を実現するために、いわば機能的に特化した、特異な〈表現〉様式なのだという点である。

人間が意識的な認識内容を込めて実体として対象化しているものは無数にある。例えば、私がいま握っている鉛筆やコーヒー茶碗も、制作者である人間が意識内容を込めて実体化した〈表現〉であることは確かであろう。お休みなさいという仕草をして床につく子どもの一連の様子も、もちろん、子ども自身の認識内容の意識的な実体化という意味ではひとつの〈表現〉である。我々の日常生活や社会的生活をおおっているほとんどすべてのものは、人間の意識的な行為が関与してできあがったものであり、その意味では、ほとんどあらゆるものが〈表現〉なのである。

しかし、そのような無数に存在する〈表現〉のなかで、人間の感受能力において“同型”として受け取られ得るという性質を保持し続けながら、同時に、さまざまな立場の人間のあいだを、主体者の側からも、観察者の側からも、無差別に、無限に、そして“双方向”に、対象化され続けているという特性を持つ〈表現〉形態は、今日の我々の社会を振り返ってみても、貨幣等を除いて、ほとんど類例は存在しない。

多くの〈表現〉は、その形態において必要以上に个性的であり、そもそも表現形態としての“同型性”を保持し得ないものが大多数である。そして、その表現への関わり方においても、さまざまな限界ゆえにそれぞれに特殊性を払拭できない場合がほとんどである。

そうした通常の〈表現〉形態一般と対比してみれば、“言語”という〈表現〉形式が、きわめて特異な位置を占めるのは明瞭であろう。

この言語という表現形式は、まず、人間の身体に直接的に付着しているような〈表現〉形態（例えば仕草とか踊りとか）とは異なり、身体の外部に実体化された物質

的存在である。

しかも、通常は、身体の外部に実体化された表現形態は、一定の物的形態を有し、それゆえに、その物理的な移動には種々の制限を抱えているのが普通ののだが、言語表現は、口から発せられた音声や紙に記された文字等の原初的な形態のみではなく、今日では電子的な記号という物理形態に対象化されることで、その移動にともなう制約を極限まで少なくしてしまっている。言い換えれば、言語〈表現〉は、移動にともなう物理的制限をほぼ払拭し、人間の間を行き来しうる可能性が限りなく大きくなっているのである。

しかも、言語表現は、そのような激しい移動性にもかかわらず、通常の表現物一般のように、その物理的移動に際して形態的に摩耗することもない。また、その移動に当たって利用される物的基盤がたとえ異なったとしても、そこに表現された意味内容に変化が生じることもない。例えば、言葉は、しゃがれ声のおじいさんがしゃべろうが、かん高い声の児童がしゃべろうが、インクで紙に書こうが、ネオンサインで表示しようが、どのような状況によらずに、つねに同一の類型的な示差性を失わない。

さらに、この〈表現〉形態は、あらゆる人に対して、分け隔てなく、すべて、その表現の対象化と受容の可能性が与えられているという点もきわめて特異である。

例えば、ピカソの絵画は、現代では多くの人々の目に日常的に容易にふれることが可能である。つまり観察者の立場からはさまざまな人々に開かれている。しかし、その同一な表現を主体的な立場からなせる人物は、歴史上、ピカソ本人しか存在していない。つまり主体の側からその〈表現〉にかかわる機会、ピカソ本人を除けば、他のだれにも与えられていないのである。

それに対して、言語は、だれがその表現を対象化しようがかまわないし、誰がその表現を受容しようがかまわない。その意味で、無限の人間のあいだの双方向的な対象化の可能性に開かれているのである。

第11項 高頻度かつ社会的な双方向の対象化過程が導き出す、エミックの視座の認識内容とエティックの視座の認識内容との同調化

さて、このように考えれば、人間相互のあいだを、“きわめて高頻度”で双方向的に対象化され続けている言語表現という特殊な〈表現〉においては、エミックの視座

に立ったときに私の頭脳の中に意図された認識内容と、エティックの立場から見つめていたときに私の頭脳の中に措定された認識内容とが、繰り返し繰り返し高頻度で私の頭脳の中に互いにたち現れ、その結果として、その二つの認識内容が互いに影響しあう程度が、非常に大きくなるに違いないことが納得されるであろう。

ここで、考えてみてほしい。このようなきわめて高頻度での認識内容相互の接触のもとで、この同一の〈表現〉に結びついた二種類の認識内容を、私は相互にまったく独立かつ無関係に、頭脳の中にとどめておくことはできるだろうか。

たしかに、二種類の認識内容が自らの頭脳の中に高頻度で同居し互いに強く影響を与えあう状況であっても、主体的な立場から〈表現〉に接するときの「理解」と呼ばれる認識内容と、観察者の立場から外在的な文脈の中に認める〈表現〉の〈意味〉への「説明」と呼ばれる認識内容とは、本来的には異質な出自を持った内容なのだから、この両者をたがいに独立に扱うということは、もちろん原理的には可能である。

しかし、このような想定が為しうるのも、それを私の個人的な私事と考えた場合までであるという点には注意しなければならない。もしもそれらの〈表現〉の対象化が、私だけではないさまざまな複数の他者を巻き込みながら、いわば“社会的”なかたちで、互いの間を高頻度で双方向に対象化されているとしたらどうであろうか。そうした想定は、その根拠がきわめて貧弱なものにならないだろうか。

いまここで想定している、言語の高頻度の双方向的な対象化過程とは、私自身と、私が目撃しているさまざまな他者が、同一の〈表現〉の対象化を介して、相互に密接な関係をもって生きているような状態を意味している。そのような状況の下で、一方では、他者が行なう〈表現〉に対して、それに対応した特定の〈意味〉を受け取りながら、もしもその一方で、自分自身は、その同じ〈表現〉に対して、意識的に全く別の〈意味〉を盛る行為をしたとする。すると他者はそれにどう対応するだろう。

たしかに、それが一度だけのことであれば、意味不明な行動だとしても、他者は寛容に扱うかもしれない。しかし、同じことを二度、三度と続けることは不可能である。つまり、継続的かつ長期間という条件で考えたとき、そのような行動をとる人物は、他者からは、理解不可能な〈表現〉を対象化し続ける存在として、〈表現〉の交

換関係の外に位置づけられてゆくに違いないのである。それはつまり、私の側から“他者に向かっての”〈表現〉の対象化が、他者の側からの受容の『拒絶』によって不可能になるという事態を意味する。いわば、仲間に入れてもらえなくなるのである。だからこそ、そうした事態を回避して、自分自身もその同一の〈表現〉の双方向的な対象化過程に参加したいとすれば、外在的な視座からの「理解」内容と、自分自身の主体的な視座からの認識内容とを、自身の内部で同調させることを、我々は選択せざるを得なくなるのである。

この事態は、10人以上の子ども達が黄色いボールを相互にパスしあっているゲームを想定してみると理解が容易であろう。私とその目の前の子ども達がボールをパスしあって遊んでいるのを見て、そこに一定のルールを認知し、その上で、私とその子ども達のボール投げゲームに参加したとする。周りの子ども達の間でボールがやりとりされているだけで私にボールが回ってこなければ問題は無い。しかし、その黄色いボールがいざ自分自身にパスされてきたときに、私が、その想定されたルールを意図的に無視して、まったく自分自身の勝手な判断で、そのボールを遠方へ投げ捨てたとしたらどうであろうか。周りのみならず驚き、そしてそのゲームはいったん中断するであろう。しかし、それが一度であれば、周りの子ども達も寛容であろう。やがてゲームは再開される。しかし、またしてもボールが私に渡されたとき、私がやはり自分自身の判断でかつてにボールを再度投げ捨てたとしよう。このような事態が何度も続けば、周りの子ども達はしまいには怒りだして、私はそのゲームに参加できなくなるに違いない。ゲームに参加しようとすれば、私自身もそのルールを主体的な立場から積極的に遵守せざるを得ないのである。

つまりここに、自分自身の側からの〈表現〉対象化に対する他者からの具体的な拒絶という事態と、それを避けて他者との関係を維持したいという内面的な欲求とが原因となって、わたしの認識の中に、観察者の立場から了解されている「説明」的な〈意味〉内容が、わたし自身の側からの「理解」にもとづく〈表現〉対象化行為において、いわば〈表現規範〉として機能するようになるわけである。私の表現行為を規制し、その結果として、私の認知過程における $A \rightarrow a$ という対応関係が、表現過程における $a \rightarrow A$ という対応関係と、ひとつの循環的な同調現象が生まれることになるのである。すなわち、両

視座のあいだに、強い相互浸透の関係が形成されることになる。

その結果として生じるのは、認識論上は、どのような事態であろうか。

私自身がその特定の〈表現〉に対して結びつけている特定の認識内容と、私の周りの他人がその〈表現〉に対して結びつけていると考えられる〈意味〉とが、たがいに密接不可分なものとして認知されることになり、つまりは、その同一の〈表現〉の相互対象化過程に参加する人間集団の内部では、それぞれの個々人の視座の内部において、〈表現〉A = 〈意味〉aという関係が、認識という受動的側面においても、認識内容の対象化（表現行為）という能動的側面においても、非常に強い規範として形成されることになるのである。すなわち、ここに一つの過程的に完結した認識と表現の単位構造が生み出されることとなるのである。

第12項 小括

まとめてみよう。人間の対象化行為によって作り出される、物理的な実体としての〈表現〉には、つねに、主体内在的なエミクの視座からの“理解された”認識内容と、観察者のエティックの視座からの“説明可能な”認識内容とが、その両端から結びついているという原構造が存在する。そして、通常の場合には、その両視座は容易には重なり得ない異質性を有したものとして存在するのであるが、言語表現というきわめて高頻度での双方向的な対象化過程を許す特殊な過程、いわば言語ゲーム的状况が現実的・経験的に成り立つような場合には、その双方向的に絡み合う、斉一的な人間の行為的な現実が基盤となって、そこに一定の『予期』の構造、“集団のなかで共有された、行為者の認識内容の対象化行為を規定するような、表現規範として機能する〈意味〉が生じてくるのである。そして、その共有された〈表現規範〉という『予期』を前提とすることで、それぞれの人間は、あらたな創造的自己表出の場面においても、それぞれの個別的な〈表現〉の対象化にこめる主体的な意味を、その規範的予期構造の基盤の上で、表現しようとするようになるのである。

つまり、〈表現〉の意味内容の人間相互の理解の共有を担保しているものは、個々の人間の孤立した頭脳の内部にやどる感応や推論能力それ自体ではなく、そのような能力を持った人間諸個人が、共通の形態的同一性を有

した〈表現〉を双方向的に高頻度で対象化しあうという、その関係行為の持続という現実からこそあるのである。

〈表現〉を媒介とした関係行為の第一義性ということこそが、認識論上の理解可能性を支える、存在論的な前提なのである。

第5節 結論と考察

以上、3節にわたる考察の中で、社会現象の認識における科学性を追求するための、原理的な考察を積み上げてきた。

幾度も述べているように、社会科学的考察においては、人間という主体的存在がその認識対象となる。そしてそのことに起因して生ずる、視座の複数性というものが、社会科学的認識のありかたに、非常に深刻な混乱状況をもたらしてしまっている。しかし、この混乱を解決しないままでは、科学性を意識した、社会科学の考察が力強く前進することはあり得ないにちがいない。このような思いからの考察であった。

最後に考察の結論をまとめておこう。

まず第一に、本稿の冒頭では、科学性の根拠たる仮説検証プロセスを、社会科学的事象においても明示化するうえで、事前の仮説的予測の明示と、その仮説的予想の意識的な検証というプロセスがきわめて重要であることを再確認すると同時に、社会現象の考察においては、認識対象が人間それ自体であるということに起因して、上記の仮説検証プロセスの基盤である、一貫した仮説的予想の設定の保持が、きわめて不安定な状況に置かれてしまうことを確認した。

次に、こうした視座の複数性に起因する問題状況は、エミクの視座からの「理解」と、エティックの視座からの「説明」という、認識論的立場の異なる二つの分析視角として整理が可能なこと、そして、社会科学的現象の考察に際しては、この二つの分析視角の先に広がるそれぞれの研究戦略を意識的に区別して、取り組む必要があることを明らかにした。

さらに、章を改めて、このような認識論上の視座の整理を、改めて人間の〈表現〉対象化行為という存在論の地平に移して再考察することとし、まずは、社会的現象の考察は、そもそもにおいて、人間の対象化行為と、その結果物に込められた表出意図への「理解」が求められるという構造を有していることを確認すると同時に、し

かし一方で、この客体化された表現行為の表出物は、文脈連関的な位置づけの考察を通して、観察者の立場からの「説明」的考察の対象ともなると言うことも確認した。つまり、この両者を併せるならば、人間の主体的表出過程において生み出されるところの諸現象の考察、すなわち、社会現象の考察は、結果物たる客体的存在の両端に、「理解」と「説明」という異質な二種類の認識内容がその両端から結びついているという一般的な構造を有していることを明らかにした。

さらに、本稿では論を続けて、この客体的表現物の両端に結びついた「理解」と「説明」という異質な認識内容が、いかにして互いに重なりうるのかを検討し、表現行為の双方向性、言い換えれば、「理解」→「表現客体」→「説明」という過程の内容のそれぞれの立場に、同一の人間が立場を変えながら、社会的に参加しようと言うことにその現実的根拠があることを明らかにした。すなわち、社会的現象の認識の客観性の現実的な根拠は、人間の〈表現〉を媒介とした相互対象化行為という存在論的な地平に支えられて成り立っていること解明した。

この結論をふまえて、上述の、エミックの視座への「理解」にむけた研究戦略と、エティックの視座からの「説明」という研究戦略の二元論を考え直せば、それは、それぞれの研究戦略の相違を、言語ゲーム的な表現の相互対象化を現実におこなっている関係行為の質的な相違、あるいは、そのような質的な相違を有する関係行為を担う人間集団の特性の相違という、いわば存在論的な違いにおいて認識し、分析を進めてゆかなければならないという内容に整理できるだろう。

ここで例えば、研究者コミュニティのなかで共有されている言説体系における自然現象の説明記述と、農民コミュニティの中で共有されている言説体系における自然現象の説明記述の内容の質的相違という問題を考えてみよう。周知のように、両者はともに同じ自然現象を対象物として扱ってはいるものの、研究者コミュニティと農民コミュニティそれぞれに共有される認識内容は、すりあわせることも不可能なほどに、互いに大きく異なっている現実がある。この異質な言説体系のあいだの相互の摺り合わせ・認識内容の架橋という課題は、近年、自覚はされているものの、多くはなおざりにされてきたという状況も周知のものであろう。

そして、このような認識論上の相違を、上述してきた存在論的な相違という次元で改めて捉え直してみれば、

社会科学における認識論的混乱状況の、その背後に、人間社会の社会的分断状況という存在論的な問題次元が存在していることが、明瞭に浮かび上がってくるのである。

つまり、人間社会の内部には、言語表現を、何の規制もなく自由に双方向的に対象化する状況が、つねに、現実的に存在しているとは限らないのである。

例えば、人間社会の内部には、過剰な剰余生産物の領有をめぐる、支配－隷属という関係性が歴史的に形成されている。そして、そうした支配－隷属という関係性を含みこんだ社会関係の内部には、立場の相違をのりこえての、双方向的な表現行為の対象化を許さないような状況、いわば片務的な・一方向的な関係性が至る所に存在するのである。その結果、上述してきた言語ゲーム的な表現の双方向的对象化とその中で生じるエミックの視座とエティックの視座の同調という事態がはかられず、異質な立場の人間集団ごとに構造化され、分化してしまうという状況が生じてしまうことになる。この言説体系の相違は、ジャーナリズムの分野で、例えば、〈殺す側の論理〉と〈殺される側の論理〉の相違という形で受けとめられてきた問題状況と重なるであろう（注9）。

社会科学的認識の混乱状況を乗り越えるためには、この、人間社会の関係行為における、存在論的な分断状況という領域にしっかりと理論的な考察のメスを入れてゆかなければならない。そして、その存在論的な分断状況が及ぼす影響をしっかりとふまえたうえで、その関係行為の内部に生まれてくる言説の説明体系のそれぞれの一貫性を、仮説検証的な自覚をもちながら、つねに確認しなければならないのである。

しかし、このような課題に取り組むためには、まず、人間社会の存在論的な構造の分析、いわばマルクスが言うところの下部構造の分析をおこない、その概念装置のうえで、言語表現にともなう説明・理解の体系の内部構造のありかたの検討という上部構造論の分析へと進んでゆかなければならないことになる。

しかし、この課題は別稿で果たすこととし、とりあえず、社会科学における認識論上の混乱を存在論的な分析課題へ引き継ぐという部面までで、本稿を閉じることとしたい。

〈注 釈〉

注1) 1990年代以降の人文社会科学分野では、冷戦構造

の解体に伴って、それまで長年にわたってドミナントな位置にあった諸学説体系が、さまざまな形で相対化され、又、文化史研究等において事象の構築主義的生成の過程に人々の高い関心が注がれた経緯から、物事の多面性の強調、さらには社会現象に対する「科学性の自覚」の強調よりも、科学性を僭称する言説の非科学性への攻撃にこそ人々の関心が向くという事態が生じた。そうした一連の学的な捉え返しの試みの多くには筆者も深く同意するものの、一方で、そこに生じた相対主義的現象理解の過度の優先のもとで、科学性への自覚の放棄とも呼べるようなきわめて顕著な混乱状況も生じてしまったとうけとめている。例えば、ソーカル（2000年）などはその顕著な例であろう。

注2) 通常、科学哲学の分野においては、科学に於ける真理性的根拠として反証可能性を掲げた K. ポパーの一連の論議が有名である。しかし、仮説の目的意識的検証の営みを「実験」とよびその一連の操作が、社会科学分野にも十二分に適用可能であることを、筆者が深く自覚させられたのは、戦後の教育界で仮説実験授業の提唱者として有名な板倉聖宣の一連の著作からであった。

注3) 社会科学に於ける方法論議においては、M ウェーバーの『社会科学と社会政策における認識の「客観性」』論文が古典的著作として有名である。この著作の中でウェーバーは、一方で、価値判断と事実認識を峻別しなければならないことを強調すると同時に、他方で、価値判断を抜きにしたいかなる理念型設定もあり得ないことを強調する。自然科学の方法論議において、人々の価値観云々が正面から議論されることはきわめてまれなことであるが、社会科学の分野の方法論議においては、理念型設定における価値判断の不可避性と、価値判断と事実認識の峻別という両者の隘路を如何にして抜けてゆくことが可能かという問いを、このように正面から課題として設定されざるをえない状況が古くから自覚されてきた。

注4) 文化唯物論の提唱者として有名なマービン・ハリスは、言語学者パイクの用語法を拡張して、

emic etic の両概念を人文社会科学分野における研究方法論上の最重要概念として提唱した。（邦訳文献としては『文化唯物論』早川書房1987年において詳細に取り上げられている。）また、アメリカ人類学会が概念のそもそもの提唱者であるパイクとハリスを招き行われた論議の記録は、Emic and Etic: The Insider/Outsider Debate, Headland, Thomas N. 1990として英文刊行されており、この両概念を巡っての幅広い論争の経緯を確認することができる。

注5) 人文社会科学の方法論争において「説明と理解」の対概念を初めて導入したのは、歴史学派の歴史家であったドロイゼンであると言われる。その後、デイルタイがその対概念をさらに哲学的に基礎づけようとしたり、また、ウェーバーが「理解」社会学を提唱、一方で、ポパーやペンベルが科学的「説明」の論理構造の分析をはかるなど、「説明」と「理解」という区別は人文社会科学の方法論におけるもっとも原理的な区別と考えられてきた。筆者は、この古くからの論争の経緯を踏まえながら、上述したマービン・ハリスのエミクとエティックの両概念を重ねることで、本稿における論議の組み立てを行った。

注6) 社会科学分野において圧倒的な理論的体系性と影響力をもってきたヘーゲル・マルクスの学的方法論においては、人間が為し遂げるところの対象化行為が、疎外概念とともに、社会現象全般を捉える上での、もっとも重要な概念装置とされている。そして、ここであらためて深く認識しなければならないことは、この人間が為し遂げるところの対象化行為やその結果物を我々が受け止め、関わってゆく上で、本稿で解明の焦点としている「理解」という認識論的態度が不可欠だという点である。マルクス労働過程論のさらなる展開のためにも「理解」と「説明」をめぐる方法論議に、我々はあらためて注目すべきであろう。

注7) なお、ここでは、“説明可能な”〈意味〉としてつかまれた認識内容を、 $\alpha \beta \gamma \epsilon \cdots$ 等の複数の認識内容と仮定してさしあたり位置づけたけれども、その意味内容自体は、この私自身が〈表現〉

Aやその表現がおかれた文脈の客観的認知の中から、具体的につかみだしてきたものであるという点は改めて強調しておかなければならない。ここに示された〈説明〉としての意味内容は、客体的事物を根拠として生み出されるところの認識内容であり、その根拠を客観的に検証することは可能な説明体系である。その点では、本節で解明の対象としている、主体内在的視座からの〈表現〉に込められた〈意味〉に対する「理解」という課題とは、その本質をまったく異にする認識論的基盤を有している。

注8) 人間社会に生起するさまざまな諸現象は、ほとんどが関係規定的な連関の中で生じている。しかし、この関係規定的な現象は、つねに双方向的な因果連関の中で生起する現象由に単純な因果記述をゆるさないという特質をもっている。ヘーゲル来のドイツ哲学、およびその学的継承者であるマルクスは、このような関係規定的現象を概念の俎上に載せるうえでの認識論的な困難さを前にして、弁証法とよばれる認識の組み立て方、現象の説明体系の在り方を重視し、それを積極的に活用した。本稿で提示された、〈表現〉を媒介した二つの異質な立場・視座の相互関係とその帰結という図式においても、やはり、弁証法的な概念整理が理論組み立てにおける重要な足場となるであろう。この課題の本格的な展開については、改めて別稿で取り組むこととしたい。

注9) 有名なのは長年にわたり朝日新聞社を足場として、数々の著名なルポルタージュを発表してきた本多勝一氏であろう。彼の問題提示能力の高さや、彼が書き残したルポルタージュが提起する論点の深さと広がり、〈殺す側の論理〉と〈殺される側の論理〉の対比、両者の間の越えがたい異質性を、きわめて明確に焦点に据え、それを踏まえて論考を展開している点にあると考えられる。

〈参考文献〉

- ・マーヴィン・ハリス著、長島信弘・鈴木洋一訳
「文化唯物論—マテリアルから世界を読む新たな方法」上下、早川書房、1987年

- ・MARVIN HARRIS
THE RISE OF ANTHROPOLOGICAL THEORY,
London, Routledge & Kegan Paul, 1968年
- ・MARTIN CURD & J.A.COVER, PHILOSOPHY OF
SCIENCE: The Central Issues.
New York, W.W.Norton & Company Inc.
- ・THOMAS N.HEADLAND, KENNETH I.PIKE, &
MARVIN HARRIS
EMICS AND ETICS: The Insider/Outsider Debate,
SAGA PUBLICATIONS, 1990年
- ・マックス・ウェーバー著、富永祐治・立野保男訳、折
原浩補訳 「社会科学と社会政策にかかわる認識の
『客観性』」岩波文庫白209-2, 1998年
- ・マックス・ウェーバー著、祇園寺信彦・祇園寺則夫訳
「社会科学の方法」講談社文庫1151, 1994年
- ・マックス・ウェーバー著、松井秀親訳「ロッシヤーと
クニース」未来社, 1988年
- ・板倉聖宣「科学と方法—科学的認識の成立条件」季節
社, 1969年
- ・三浦つとむ 「日本語はどういう言語か」講談社学術
文庫43, 1976年
- ・カール・R・ポパー著、久野収・市井三郎訳
「歴史主義の貧困—社会科学の方法と実践」中央公論
社, 1961年
- ・アラン・ソーカル 「知の欺瞞—ポストモダン思想に
おける科学の乱用」岩波書店, 2000年
- ・内田義彦 「内田義彦著作集全10巻」岩波書店
- ・廣松 渉 「物象化論の構図」岩波書店, 1983年
- ・廣松 渉 「世界の共同主観的存在構造」勁草書房,
1972年